

氏名	立岩朝子
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第295号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉門「皮膚」 〈論文〉思想の変態

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(美術学部)	三田村 有 純
(論文第1副査)	〃	〃	(〃)	佐藤 道 信
(作品第1副査)	〃	名誉教授		増村 紀一郎
(副査)	〃	教授	(美術学部)	島田 文 雄
(〃)	多摩大学	非常勤講師		井谷 善 恵

(論文内容の要旨)

「今を生きること」、これは、自分の人生の中核といえる文句である。この上なく当たり前ながら、「生きる」という超日常なくしては、思考も表現も成し得ない。まずは、この大前提が自身の制作の根底にあることを明記しておく。宇宙の中の地球の、その僅かな部分の日本のごく小さな単体の私が「生きる」のは、人間が定めた概念で言えば、長くて80年程だ。その間に目にしたものの重なりは、自ずと私に考えを生む。それらは軸を成しながら言語によって形成された思想となる。言語とは人々に共通の理解を生み、伝達手段の中で、最も強く、明瞭なものだ。使い手によって、人々を魅了し、或いは深い傷をもつくり得る。自分の思想は、言語によって形成され、認識され、一度は形を留める。だが、どうやら終わりではない。自己の内から湧き出でる表現への欲望は、それらを物理的な存在へと移すのだ。何気ない日常に溢れる思考の発端に遭遇した後、言語によって形成された思想が築かれ、表現欲の発生源となる。自分の場合、それらを直接、言語表現においてではなく、造形表現という手段のもとに、三次元へと表出する。この、「思想」が姿を変え、物理的な存在へと移り行く様を「変態」と捉える。

人間は何かを認識するとき、脳を使う。言語ならば耳にした音を、或いは目にした文字を脳で解釈し、何らかの思いを生む。何がどうであったからこのように思う、と自分の反応に対する説明がし易い。しかし美術はときに、人の表層を突き抜け、五感を総じて稼働させる刺激を与え、実体に迫り来る。本人すら得体の知れぬところへ届き、思いを生む。何か、脳で認識する前に、体中を巡ってしまうとでも言うべき反応だ。別段、科学的な根拠もなく、脳の働きにも無知だが、美術作品を目前にして、このような感覚を経験することがある。これは、造形表現が、言語という共通の伝達手段を介さないことによると考える。

私の制作において考える。思想が変態し、実在物となった原形が、人間の实体へとその歩みを進めるのにあたり、支えとなる二つの力を加えたい。

一つは工芸だ。私の捉える工芸とは、「人とともに生きる美術」である。年を重ねることへの不安や抵抗をよく耳にする。表面的な若さに囚われた現代人は、生きることへの美意識を、何と感じているのだろう。年をとることは、生きている証である。人間には、年相応の魅力があって、その本質は生き様にある。つまり、年を重ねて生まれる魅力は美しい。ふと、重なるものに気付く。つくり手の思い、素材の力、先人の知恵と工夫に育まれてきた伝統の技が生む工芸作品は、年を重ねる耐久性とともに、その美に磨きをかけ、人の心を掴み続ける力を持つ。現代人の暮らしを見る。ものが生まれて人の手に渡り、

ゴミとなるまでの時間が実に早い。人の心を掴んでいるのは一時で、より新しいものへと心が移る。地球規模の環境破壊は、大量生産、消費社会の産物だ。悲観的だが、世は21世紀、この悪循環から抜け出そうという、兆しも感じられる。身の回りにあるものが、自分と共に生き、その魅力に磨きをかけるとなれば、人々の意識にも変化が現れるだろう。時代を読んでも、工芸としてのものの存在は力強い。

そして、もう一つは、漆である。その独特な性質は、地球上でも稀有な存在だ。修士課程一年次に、江戸時代を軸に読み解いた「文芸と漆―漆の魅力―」という研究をし、得たことがある。狂言や俳句、歌に登場する漆は、七変化であった。また、漆に因んだ伝説や逸話は全国各地にある。その一つに、青森県に伝わる、「婆さまさうるし塗った話」という民話がある。年老いた老夫婦は、毎日を何事もなく過ごし、暇に任せて、どちらが早く死ぬかと話すも、二人とも元気だと戯れ合うような日々を送っていた。何年か経ち、婆さまが亡くなったが、死んでも土に埋めずともにいるという約束を、爺さまは守った。だが、腐敗臭に耐え切れず、通りすがりの塗師に、事情を説明した。何重にも漆を塗られた婆さまの死体は、臭いも消え、腐敗も止まったようであった。この後、婆さまの死体は夜な夜な動き出し、自分に漆を塗ったことを責め立てては、闇夜にその漆黒の体を溶かす如く消えるのだ。最後は何とか成仏させるのだが、この話は興味深い。

漆は、人々に近づく程に注目される。一体、漆の何が人々を魅了するのか。樹木の紅葉やかぶれを起こすなど、野性味のある姿から、母胎を得て塗りものとなる。朱や、加飾技法によって輝き、見事に極まる変幻自在な姿。そして、透き通る黒。この類稀なる質と色に人々は心を掴まれる。どこまで続くのだろうかこの暗闇は、と想像力をかき立て、知らずの内にその世界感に引き込まれ、神秘性や黄泉の国へと通ずる何かを感じ取ったりするのであろう。今も変わらず、この力は、世界に通用すると確信している。

人々の暮らしに求められる機能や要素を持つことで、その距離を縮め、漆の魔力で人を引き込み、心を掴んだら離さぬような、耐えぬ訴えを持つ。言語という明解な姿で成り立っている思想が、物理的な存在へと姿を変え、一見すると力が弱まったかのように曖昧さを帯びる。だがそれは、新たな様相を有し、より人の実体へと迫らんとする力を手に入れる。これが私の表現の目指すところであり、探究の止まぬ核だ。

(博士論文審査結果の要旨)

筆者の中でイメージが生まれ、それが造形化されるプロセスは、通常とはかなり異なるらしい。多くの作家の場合、イメージから造形化へのプロセスはダイレクトなものであり、言語と造形は、イメージに対する異株同根の関係にある。ところが筆者の場合、触発による思考がまず言語化され、そこから発生したイメージと表現欲が、造形化されるという特殊なプロセスを踏むらしい。そのプロセスを中心に、作品を絡めて論述したのが本論文である。

論文のタイトルは「思想の変態」。ここでの「思想」は、思考くらいの意味のようだが、それがまず言語化として文章化されるという。そしてそれがイメージと表現欲を生み、造形化されるプロセスを「変態」とする。変化あるいは展開ではなく「変態」としているのは、その変化が、動物の成長過程で起こる変態のように、原型をとどめないほどの劇的なものであるためらしい。このプロセスの特殊性と、それをまた言語で説明するという作業のネジレから、査読者達も当初、その全体像を理解するのに時間がかかった。そのため必ずしもわかりやすい論述とは言えないが、造形化のプロセスに関して初めて出会ったパターンとして興味深いものがあった。

しかし筆者が漆芸という分野を選択した理由と、実際の作品の造形を決定する判断基準は明快である。筆者自体、ことばにすると拍子抜けするというほど簡単な「カッコ良さ」である。作品も、「帽子入れ」(2006)、バングルの「BRAVE GRACE」(2008)、たいこ盆の「Air」(2008)など、機能性や耐久性を考慮

したわかりやすいものが多い。とくに目立つのは、「たらちね FARTHER MOTHER」「おどり松」「LINE AIR 07」「夜さり」「有り明け」(2007)など、照明を意識した作品が多いことである。文中での引用にもデザイン関係のものが多く、筆者にとってデザインと工芸の境界は低いようだ。通常、デザインは機能と目的から素材・技術が選択されるのに対して、工芸は素材-技術-人の一貫した体系性が強いのだが、筆者の場合は、「漆」「カッコ良さ」「機能」が等価に並列しているように見える。修了制作「門-皮膚」も、天井から吊るす形式は、照明の延長にある。ただこの作品のコンセプトとそのきっかけは、シリアスなものである。山での伯父の転落死というショッキングな事故に、友人が発した「皮膚が引き剥がされるような感覚」ということばから、まず「皮膚」が、そこから生死あるいは精神と肉体の境界としての「門」がさらに生まれたという。

作品は明快であり、「思想の変態」の特異なプロセスについては、説明に苦慮した様子が窺われるものの、そのリアリティとオリジナリティは、学位論文に十分に値するものとして、論文審査会での評価を得た。

(作品審査結果の要旨)

思想の変態-作品化へのプロセスをこう位置づけ、作品を物理的構成物と呼ぶ、漆の持つ力を、輝きと色彩、変幻自在な姿、カブレを引き起こす野性味、透き通る黒色と制作者は言う、この漆に対する思いを背景に前期修士課程の研究制作から後期博士課程を研究する、さらに両課程を通じて一貫しているのは、形態は機能を起点とする表現方法の姿勢である、工芸の造形や機能は思想の変態として追求する。

提出作品は、天井から吊り下げられ、漆の作品とすれば大型である、外界からのあらゆる境界をいしきする-門-である。

手前側の板と向こう側がつくる輪郭の微妙な違いから二枚の距離を意識させる、漆黒の蠟色漆が美しい、やや離れて眺めると抑えた黒の艶は奥の方に吸い込むような外界を映している-皮膚-である。真下から見上げると内部空間に強烈に対比して見える和紙の白さは、両側内面の一見無作為にみえる凹凸の黒漆板に反射して優しい水面を想像させる、上からの光源によって床に作られた影は様々な連想を呼ぶ。

漆と和紙の調和が良く完成度も高い、漆の未来に新しい可能性を開く作品といえる、一体化した論文もわかりやすく高く評価できる、博士学位として相応しいと判断する作品である。

(総合審査結果の要旨)

本申請者である立岩朝子氏は、東京生まれ本学の学部、修士、博士課程と一貫して工芸、漆芸領域において広く文化的背景を探り、作品創作を重ねてきた。

その間、個展を初め多くのコンクールに作品を積極的に発表してきた。漆芸研究室と加賀市との共同プロジェクトの漆アワード2008においては金、銀、銅賞を一人で獲得するなど高い実績を上げてきた。このコンペは、漆の生活への新しい提案をテーマにしたものであり、使うことは何かということに真摯に向きあい研究してきた立岩氏が賞を独占する結果となった。

修士、博士課程で制作してきた作品は明確な用途を持っているものが多い。置かれる場所、使われる場所などを見据えてからの創作提案であり、照明としての機能を持つ作品などは伝統を踏まえ、漆の持つ独自の光を際立たせる作品である。しかし立岩氏は本申請の出品作品のように、実は具体的な用途性を感じさせない作品も提示し続けてきた。

これは論文の中で語っている自己の内から湧き出る表現への欲望を物理的な存在へと移すこと、三次元へと表出する行為であるという論理の中で、うかがい知ることができるのである。「思想」が姿を変え、物理的な存在へと移り行く様を「変態」と語るように、自己の思惟を造形物として作り上げることであ

り、特に機能を表に出すものではない。

漆の魔力で人を引き込み、心を掴んだら離さぬような、耐えぬ訴えを持つ作品作りを目指すと語るように、漆の持つ根源的な力の表出を試みている。

論文の水準も高く、提出された作品との融合性も高く今後の工芸の在り方に多くの指針をもたらすものと認め、総合的に本学の博士号取得としてふさわしいものとして認め、広く社会での、活躍を期待するものである。